

おてら

常例十六日講  
毎月十六日午後一時より  
お経練習・法話会

写経会

毎月第二・四金曜日  
午後一時より

先祖への供養は

私への供養

# 春彼岸法要会

三月十七日〜二十三日

三月二十日(木・祝)

午前十一時より

彼岸中日法要

護持会総会

ご本尊様にお参りしてから

お墓参りをしましょう

## 不完全

住職 蒲原 霊英

一月二十一日、イチロー氏が米野球殿堂入りを果たしました。彼はスピーチで、一票足りなかったことに「すごく良かった」と述べたのですが、「不完全だから進もうとできる」ので「不完全であるというのはいい」という理由です。実に、野球の求道者と言われる彼らしい言葉です。

では、「完全」とはどういうことでしょうか。仏教では「完全」とは「悟り」であり、欠ける所の無い円で表されることがよくあります。「悟り」とは、迷いの世界から脱却して真実に目覚めることであり、仏教では「悟り」を得ることを目的としているので、まずは迷いの世界からの脱却を目指します。

そのためにまず、例えば座禅を組んだり、滝に打たれたり、荒行を行ったりして、自力で迷いを無くそうとする方法が考えられます。しかし、日常生活を送りながら毎日このような行をするには不可能に近いです。それに、確かにこのような行をしている最中は心が無になつて迷いが消し去られていくかもしれませんが、終わってしまったらまた元通りになるのが普通の人間でしょう。では、自力で迷いを無くせない人は、唯々闇雲に一生ああでもないこうでもないと思い、苦しみ続けるだけでよいのでしょうか。

親鸞聖人も、二十年も比叡山で修行したにもかかわらず、迷いを無くす

ことはできませんでした。だからこそ、山を下り法然上人の下に行かれて、迷つたままの私をそのまま悟りの世界へ渡してくださる阿弥陀如来にすべ

てお任せすることを選ばれたのです。色々なことが次々と起こり、それでも頑張って善人ぶってみても、心の奥底には絶えず見栄や嫉妬や不平不満

愚痴等々が次から次へと沸き上がって来る、そんな愚かで駄目な私の姿は、他の誰の目からも見えなくても阿弥陀様だけはお見通し。その智慧の光で私を照らし、「しっかりと自分自身と向き合ってみなさい」と、私自身も見

たくない私の真実の姿を映し出してくださいます。それなのに、見ようとせずそのまま自堕落に過ごす私には、気付くまで声を掛け続けてくださ

る。向き合つて脱却しようと思張つてみるもやはり駄目な私には、「そうか

そうか。大丈夫大丈夫」と寄り添い励ましてくださる。「南無阿弥陀仏」と阿弥陀様のお名前を喚ばせていただくことは、自分自身と向き合うことでもあり、そんな私を見捨てずに、此岸(娑婆)から彼岸(悟りの世界)へそのま

ま渡してくださる阿弥陀様に御礼申し上げることもあるのです。彼岸にあたり、改めて不完全な私と向き合いお念仏申しませう。合掌

# 御正忌報恩講

よる念仏者の生き方を志すことができる。終戦八十年の年の御正忌報恩講に当たり、改めて私の生き方を問い直し、念仏者としての歩みを進めて参りましょう」とご親教(法話)を述べられました。

期間中は各種特別講演、や公開講座、被災地支援物産展など様々な催しが行われました。



国宝・鴻の間(黒書院)でのお齋

宗祖親鸞聖人のご遺徳やご苦勞を偲び、阿弥陀如来のお救いをいただくことを改めて心に深く味わわせていただく御正忌報恩講法要が、本山・御影堂で一月九日から聖人の御祥月御命日である十六日まで計十四座営まれました。

十五日午後の速夜法要後には、大谷光淳門主が、阿弥陀仏の本願のはたらきで「煩惱をなくすことはできない自己中心的な私である」ことを知らされるからこそ、「社会に迎合し、戦争や差別的な政策に協力する愚かさを知り、時代によって変わるこ



「御親開扉(ごしんかいひ)」  
9日午後2時前、両余間に  
宗祖90年のご生涯を描いた  
8幅のご絵伝が掛けられた御  
影堂で、ご門主が御眞影を  
安置する内陣中央の厨子の扉  
を開かれることから、御正忌  
報恩講法要が始まります。

## 『教行信証』が生まれるまで 3

親鸞聖人の出自については、聖人の曾孫で本願寺第三代でもある覚如上人によって聖人のご生涯を凶絵と詞書でまとめられた、『御伝抄』の最初のところに記されています。これによると、聖人は「皇太后宮大進有範の子なり」とされており、日野有範の子として誕生されたことがわかります。

聖人の出自である日野家とは、藤原氏の流れを汲む家です。藤原氏とは天児屋根尊から出た氏族とされ、ここから数えて十世の子孫に鎌足がいます。鎌足は、もとは中臣氏と称しており、大化元年(六四五)に中大兄皇子を助けた乙巳の変によって蘇我氏を倒し、「大化の改新」と呼ばれる政治改革を進めていった重要な人物です。鎌足は、その後「藤原」と氏名を改めて政治の中心に躍り出ました。鎌足の子が不比等で、その子の房前は藤原家北家を立て、その後は真盾、内膳と受け継がれました。内膳の長男が真夏で、日野家の祖とされます。ただ、実際には、真夏から後の平安時代中期に、資業が日野(京都市伏見区)の山荘に法界寺を建立したことから日野と名乗るようになりました。

なお、真夏の弟で内膳の三男にあたるのが冬嗣で、冬嗣の子孫は天皇家と姻戚関係を結ぶなどして、摂政と関白に次々と就いて政治的実権を握り、平安時代中期には、道長・頼道父子で代表されるように、摂関政治の中心的立場を着実に築き上げていき、栄耀栄華を誇りました。これに対して、長男の真夏は、従三位参議という官位を受けています。これは、朝廷に仕える公家としては中級クラスで、政治の世界ではほとんどその名前を見ることはできません。また、その子孫についても、政治面では平安時代に表舞台にその名が登場することはありません。日野家としては、実光の時に権中納言に進んだのが最高位です。聖人の父である有範は実光の弟の宗光の孫で、その兄弟の中の三男です。つまり、有範は日野の本流ではなく傍流にあたり、更にその長男ではない傍系にあたるのです。(本願寺新報より一部修正転載)